

株式会社 アイテン
代表取締役

饗場 健二

店舗などで使われる大型の布を縫製し、取り付けるのが「テント屋」の仕事だ。私たちの身近なところにテントは溢れているが、業界の認知度はまだまだ低い。そんな中、老舗テント屋の二代目である饗場社長は立ち上がった。ニーズに合わせたテントを提案するだけでなく、自社ならではの付加価値をプラス。そうして業界の魅力を広く発信していきたいと考えている。見据えているのは、業界の確かな未来。社長は自らの手で、切り拓いていく。

「業界の魅力を広く発信し、
その先で確かな未来を切り拓きたい」

業界の未来を見据えて挑戦！ 多様なニーズに応える「テント屋」

代表取締役 饗場 健二 × タレント 布川 敏和



テント・シート・オーニング・企画・製作・施工
株式会社 アイテン
埼玉県蓮田市井沼 740

工場や店舗などで使われるテントやシート、家庭でも使われるオーニングの企画から製作、施工を手掛ける『アイテン』。多様なニーズに応えることで確かな信頼を紡ぐ老舗だ。そんな同社の二代目である饗場社長は、業界の認知度向上を図るべく日々奮闘している。タレントの布川敏和氏が社長の熱き想いに迫った。

——早速ですが、饗場社長のこれまでの歩みからお聞かせ下さい。

ここ埼玉県蓮田市の出身です。「テント屋」として工場や店舗などで使われる大型の布を縫製する仕事を自営で手掛ける両親の背中を見て育ちました。工業用のミシンの音やテントの生地独特なおいに慣れ親しんでいましたね。

——では学業修了後は家業に入られたのでしょうか。

いえいえ。20代に入ってから仕事もせずにフラフラしている時期もありました。そんな状況を見かねた父から、東

京にあるテント屋を紹介されました。それから10年ほど経験を積ませていただき、実家に戻ると父が倒れてしまいました。それから家業を継承し、現在に至ります。

——10年の修業の中で学ばれたことを活かして、満を持して家業の舵取りを担われるようになったと。

東京のテント屋では営業職としてキャリアを蓄積した期間が長く、多くのお客様と接する機会がありました。その中で感じたのは、私共の業界の認知度の低さです。「テント屋」というと、キャンプのテントなどを思い浮かべる方が多くいらっしゃいます。けれども、皆さん意識されていないだけで、テントは幅広い場面で使われているんですよ。たとえば、運動会で使うテントやブルーシートは私たちテント屋が手掛けている主力商品の一つです。

——そう言われてみれば、私もイベントや撮影の仕事でテントにはお世話になっていますよ。家庭でも、子どもたちをプールで遊ばせる際にロール状のテントをつけていました。私たちの身近なところにテントはあるんですね。

そうなんです。当社が取り扱っている

guest interviewer



「代替わりを果たされた後も饗場社長のお母様が経理業務などをサポートして下さっているそう。お父様も、社長が志高くそして力強く事業を牽引されている姿を見て頼もしいと思っておられることでしょう。今後のご活躍を陰ながら応援していますよ！」 布川 敏和・談

テントはすべてオーダーメイドで、既製品はありません。お客様の要望を的確に汲み取り、最適な商品を提供することが私たちの仕事です。街を歩けば様々な店舗でテントが使われていますが、焼肉屋なら赤、八百屋なら緑、というようにそのお店や会社のカラーに合わせたテントをご用意することができます。また、運送業者さんが使われているトラックのシートもテント屋が手掛けているのですが、昔からあるような「ザ・運送屋」というイメージの緑色ではなく、国民的人気アニメの柄をモチーフにしたものなど、近年は個性的なシートがどんどん増えているんですよ。

——そんなことまでできるんですね。知らなかったです。以前、家庭で使っているテントを新調しようと思った時、どこに連絡していいか分からなかった記憶がありますよ。

そういった方は多いと思いますね。これまでは、一般的にテントの種類や色を自由に選ぶことは難しかったのですが、時代と共に素材や技術も大きく進化しています。今ではお客様一人ひとりの個性に合わせて、より柔軟にニーズにお応えできるようになっています。その上で、当社ならではの付加価値をつけて、オンリーワンの商品を提供することが大切だと考えています。

——インターネットで何でも手軽に買える世の中ですが、御社にお願いすれば世界に一つしかない理想のテントを作って下さるというわけだ。それは大きな強みになりますね。

おっしゃる通りです。そうして、私たちの仕事を通じてテントの魅力を発信しもっと業界の認知度を向上させ、メ



ジャーな産業にすることが私の使命だと考えています。

——素晴らしい姿勢ですね。社長のような存在がいらっしゃれば、テント業界の未来は明るいと思います。お話も尽きませんが、最後に今後の展望はいかがでしょうか。

ありがたいことに当社では、父の代からのずっとご鼠員にいただいているお客様もいますし、口コミや紹介でお客様に来ていただくこともあります。一方で、かつては一つの自治体に一店舗はテント屋がありましたが、最近は減少傾向

にあります。業界全体のこのピンチをチャンスに変えるためにも、今後はインターネットなどを通じた情報発信に力を入れていきたいと考えています。先ほども少し申し上げましたが、そうしてまずは私たちの仕事を「知っていただくこと」が大切。それが業界の認知度向上につながる一番の近道ではないでしょうか。また、現在当社では4名のスタッフを抱えています。『アイテン』としても、今後は彼らと共に事業拡大を目指していきたいと考えています。

(2021年1月取材)

Pick up the story アイデアで可能性を切り拓く

▼「世界一のテント屋」が大阪にあるのをご存じだろうか。その企業は、古くは1970年に開催された「大阪万博」において多くのパビリオン建設に携わり、日本初のドーム球場として知られる「東京ドーム」の“ビッグエッグ”と呼ばれる特徴的な屋根を造った会社だ。「業界で世界一の会社が日本にあるなんて、すごく夢があるし嬉しい」と話す饗場社長。多くの人に知られていないからこそ、テント業界の可能性はまだまだ大きい——その想いこそが、社長の原動力となっているのだ。現在『アイテン』では国民的人気アニメで使用されている柄をモチーフにした商品が好評を博すなど、これまでのテントのイメージを覆す画期的なアイデアで業界を守り立てている。時代の潮流に合ったアイデアで、テント業界の新たな可能性を切り拓く。社長の挑戦は、まだ始まったばかりだ。

▼『アイテン』では国民的人気アニメの柄をモチーフにしたトラックのシートなど多様なニーズに応える商品を提供している。

